慶應義塾大学ビジネス・スクール

財閥史における住友と古河（I）

まえがき

このケースを取り上げる理由を述べておきたい。これまで検討して来た財閥はいずれも明治維新後に政商であった。しかし，財閥イコオル政商ではない。政商以外に財閥の有力な起源をなすものが存在した。鉱山業者である。鉱区の排他的独占，劣悪な労働条件の利用，鉱産物の輸出市場の拡大等，諸条件に恵まれた鉱山業者の中からは，政商でなくても，財閥に発展するための巨富を蓄積する者が出現した。具体的には，このケースで考察する住友と古河である。なお，政商から財閥になった者の中にも，多角的事業展開の一環として鉱山業に進出し，そこで得られる富を政商活動でたくわえた富と合体して財閥を創設した例が見られた。三井，三菱，藤田などである。

さて，住友と古河は，ひとしく政商活動ではなく，鉱山業，中でも産銅業（銅山からの採鉱－精煉－加工）を財閥への発展の起点とした。また，両者とも，ひとしく，共通した産銅関連事業に展開した。林業，炭礦業，伸銅・電線製造業等である。また，どちらも電機工業（住友の日本電気，古河の富士電機），化学工業（住友化学と旭電化），アルミ工業（住友化学と日本軽金属）に進出している。ところが，このように相似した発展過程を辿った両財閥だが，昭和戦前期に両者の間に大きな格差が存在したのである。たとえば，昭和3年現在，直系会社の払込資本金総額を比較してみると，住友1億3,205万円，古河4,265万円であった。[(1)] 戦後の住友グループと

(1)　高橋亀吉『日本財閥の解剖』中央公論者，昭和5年，36ページ。

このケースは，森川英正教授がクラス討議の基礎資料として作成したものであり，経営上の適切もしくは不適切な状況処理を例示しようとするものではない。なお，ケース中の固有名詞は偽装されている。（1990年4月作成）